会員研究

細川忠隆・藩主の座と妻への愛

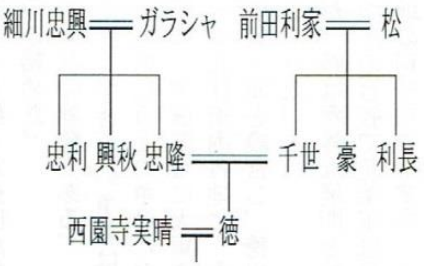
大瀬克博

昨年3月の例会で「晩年の宮本武蔵と細川忠利」を発表した。細川忠利は肥後細川藩初代藩主であり細川忠興の三男である。三男の忠利がなぜ細川家を継承したのか、その背景を述べる。

忠興の長子忠隆は天正10年（1580）生まれ、忠利より六つ年上である。慶長5年（1600）の関ケ原合戦の前までは自他共に認める忠興の後継者であった。関ケ原合戦では忠興と行動を共にして功をあげ、将軍秀忠より忠興・忠隆の活躍を讃える書状をもらっている。細川家は関ケ原での功により同年の慶長6年11月、大幅加増となり丹後11万石から豊前豊後39万9千石へ国替えとなる。忠隆は国替えで新領国へ赴く予定と書いた家臣への書状が残っていて、自分が忠興後継者とその直前まで思っていた。しかし、忠興は忠隆を新領へは同道せず、事実上の廃嫡とも言える措置を取った。

時は関ケ原合戦の前年慶長5年に遡る。9月に大阪で家康暗殺計画が持ち上がる。これは首謀者が大老前田利長、共謀者として浅野長政、土方雄久、大野治長らが企てたとされる事件である。土方、大野は配流、浅野は領国甲斐へ蟄居となり、家康は前田利長の領国へ出兵を表明する。利長は実母芳春院を人質として江戸に送ることで事態の収束を図った。この時、細川忠興は三男忠利を江戸へ人質に出している。忠隆の正室千世が前田利長の妹であり、謀反を疑われた前田家と姻戚関係にあったからである。諸大名に先がけての人質提出だったため、忠興は豊後杵築に6万石を加増された。さらに家康への忠誠を示すため関ケ原合戦では東軍の中心的な武将として戦っている。徳川家への忠誠こそが細川家の生きる道となった。

細川家略系図



関ケ原での前田家である。利長は東軍として北陸地域で西軍と戦い勝利するが、能登城主で弟の利政は西軍への義理立てから出兵を拒否する。そして前田家は関ケ原合戦に加わることはなかった。前田家は徳川家にとり油断ならない大名であった。このような前田家と姻戚関係を断つことで家康への忠誠を強く示し細川家の安泰を図りたいと忠興は考え、忠隆に千世の離縁を迫ったのである。忠興がその思いをさらに強くした出来事がある。

関ケ原合戦の3ケ月前、大阪方は東軍大名の正室を人質に取ることを決め、石田三成の命により細川屋敷を取り囲んだ。ガラシャは三成の求めに応じず、家臣小笠原小斎の長刀により覚悟の死を遂げた。そして小斎は屋敷に火を付け

自害した。その時、忠隆の嫁千世は隣家の宇喜多秀家屋敷に逃れている。千世の姉豪は秀家の正室で、何かの時は宇喜多屋敷に移るよう再三伝えていたからである。忠興は千世が細川屋敷から逃げたことを知り、「嫁の身でありながら姑を捨てて逃げるとは許せぬ」と激怒した。それが離縁話に拍車をかけた。

忠隆は父の離縁要求を受け付けなかった。「本能寺の変」の後に細川家は明智光秀との関係を断ち、それ以降の忠興とガラシャの関係に溝ができた。それがガラシャのキリスト教入信の理由とも言われている。ガラシャを死に至らしめたのは父忠興である、忠隆はそう思っていた。自分はそのような生き方はしたくない、千世のために生きるとの強い気持ちを持っていた。忠興は妻千世の離縁を承服しない忠隆を若さと未熟さの故と諦め、新領へ同道しなかった。家の存続を第一義とする父、妻への愛を大切にしたい子、その価値観の相克が原因であった。

忠隆と千世は祖父母の細川幽斎、麝香の世話を受けることになった。幽斎は隠居の身でありながら京都の広大な屋敷に住み、所領6千石を持って懐も豊かで、公家や僧侶、文人たちとの交際を楽しんでいた。忠隆は茶の湯、能、和歌を幽斎に学び公家の世界との交流が始まった。そして千世との間に子宝にも恵まれた。

慶長9年、忠興が大病に見舞われた。重篤で深刻な状況となり、徳川家康は家督継承者を三男忠利にとの意向を伝える。忠利は江戸で人質になって直ぐの会津出兵に秀忠お付きとして従軍し、その奉公ぶりを家康に絶賛され、更にそれに続く江戸生活で将軍家の信頼を得ていた。そして忠利が家督継承者に決まったのである。忠隆は自分が正式に廃嫡されたことを知ると剃髪して長岡休夢と号した。

慶長15年に幽斎が亡くなり、所領6千石は忠隆叔父の興元が相続した。細川家から幽斎への隠居料もなくなり忠隆一家の糧道は絶たれた。千世は自ら身を引き加賀前田家に帰る決意をする。子供たちの将来を考えた離縁であった。この離縁により細川家は忠隆に3千石の隠居料を送ることを決めた。忠隆は長岡休夢の号を名乗り茶の湯と能の道を究めて名をなした。忠隆と千世は一人の男児と4人の娘に恵まれたが、男児は生まれて間もなく夭折している。娘の徳は左大臣・西園寺実晴の正室となり、その子孫は孝明天皇へと繋がっている。なお、忠興と忠隆は寛永3年（1626）に京都で再会し26年振りに和解している。

藩主の座をかけ妻を愛した細川忠隆、似たようなことが英国にもある。第二次大戦前の1936年のことである。この年1月に即位した国王エドワード8世はアメリカ人女性で離婚歴のあるシンプソン夫人と恋に落ち、その年の12月に退位した。その後、ウィンザー公となり夫人との結婚を果たす。これは世界を賑わせた事件であり、アメリカでは映画にそして日本では宝塚歌劇となった。宝塚では今も「エドワード8世」として公演されている人気の演目である。妻への愛が全てに勝つ、これが女性の心を揺さぶりそして現代では期待できないものとしての憧憬が人気の秘密かもしれない。

さて、細川家の藩主継承に関することである。慶長9年に忠興が重病となり忠利を後継に決めた後、忠興の病状は奇跡的に回復した。将軍家からの見舞いの使者に同道し豊前に下向した忠利に代わり人質として決まったのは次男興秋であった。しかし、興秋は翌慶長10年、江戸に向かう途中で出奔してしまう。慶長5年に長男忠隆が事実上の廃嫡になり、興秋は次の家督継承者を自分と思い込み、興秋派の重臣たちもそれを期待していた。忠興は後継問題が御家騒動につながることを危惧し、興秋出奔を受けて興秋派重臣たちを強制的に排除した。興秋はのち大阪の陣で豊臣方として戦って捕らえられ、忠興の命で自害している。出奔した興秋の代わりに人質として江戸に送られたのは幽斎の妻麝香であった。

元和6年、忠興はまたも重い病に罹り、忠興は出家を決断する。そして翌元和7年、忠利は家督を相続し小倉城に入った。継承者に決まって実に17年、忠利36歳の時であった。

参考文献

・細川忠利　稲葉継陽　吉川弘文館
・山桜記　葉室麟　文春文庫
・江戸城の宮廷政治　山本博文　講談社学術文庫